坂部晶子，2008，『「満州」経験の社会学－植民地の記憶のかたち』世界思想社.
Nora, P., 1996 “From *Lieux de mémoire* to *Realms of Memory*”, *Nora*（*ed*）, *Realms of Memory : Rethinking the French Past, vol.1−Conflicts and Divisions*, Columbia University Press.（＝2002，谷川稔訳「『記憶の場』から『記憶の領域』へ　英語版序文」，ノラ編『記憶の場－フランス国民意識の文化＝社会史　第一巻〈対立〉』谷川稔監訳、岩波書店.）

◎書評にこたえて

島村　恭則（関西学院大学）

松浦・松田両氏が共通して投げかけている最大の問いは、戦争、植民地帝国とその崩壊、帝国の「影」といったマクロな歴史的文脈は、本書における引揚者の生活文化をめぐる記述の中でなぜ正面から取り上げられないのか、マクロな歴史的文脈は引揚者の生活文化研究の中でどのような位置を占めるのか、というものであろう。この点について、現時点では、本書の執筆者の間で議論を行なう機会を持てていない。したがって、以下は、わたし自身の調査に限定してのものとなるが、若干、コメントしておきたい。

歴史的文脈がなぜ正面から取り上げられないのか、について、松浦氏は、「このような視座の限定は、『聞き取りはこの時期を逃しては不可能になる』ため、とりあえず調査に専念するという緊急措置としてなされた」ためか、あるいは「マクロな歴史的文脈をあえてカッコに入れ、日常生活文化に照準を絞る方法に研究上の積極的な意義を見出してのものなのだろうか」と推測しているが、どちらもそのとおりである。と同時に、もう一つ、2010 年代における調査の現場では、マクロな歴史的文脈につながるような語りが話者（インフォーマント）の口から語られることはそれほど多くなかった、という事情もある。

第 1 章の記述のもととなった調査は、2008 年から 2010 年にかけて行なったものだが、そこでわたしが出会った話者の多くは、引揚げ後に日本で生まれた人や、あるいは引揚げのときにせいぜい小学生だったという人が多かった。この人たちは、引揚者家族の戦後生活史についてはまさに当事者として多くのことを語ってくれたが、親が「外地」のどこで何をしていたのか、さらには「外地」へ移住する以前の生活はどのようなものだったのか、については、個人差はもちろんあるものの、多くを知らない、あるいはまったく知らないということが少なくなかった。「現場のせい」にするわけではもちろんないが、調査の現場におけるこうした状況が、結果として記述における歴史的文脈の希薄さにつながった面もあったように思う。

とはいえ、これは調査の現場での話であって、記述や分析の場面においては、当然、歴史的文脈への配慮が十分に行なわれる必要があった。それはたとえば、引揚者とその家族は、いつごろからどのような経緯で歴史的文脈から遠ざかるようになったのか、あるいは現在でも「歴史的文脈を生きる」人びとがいる場合、それはなぜか、どのようなかたちで生きられているのか、といった問いも含むことになるだろう。こうした点については、松田氏の指摘にある「語り」をめぐる方法論的省察とあわせて、文字どおり今後の課題である。

ところで、民俗学者としてのわたしが、お二人の書評を読んでもう一つ考えたことは、「マクロな歴史的文脈としての戦争、帝国、植民地」という視点は、引揚者や戦争そのものに関わるもののみならず、あらゆる生活文化研究、民俗研究において求められるものだという点である。民俗学においても戦争研究は存在する。岩田重則、川村邦光、関沢まゆみ、田中丸勝彦、丸山泰明らによるものがそれである。しかし、それらは、戦争を主題としたものであって、日常生活文化一般と「マクロな歴史的文脈としての戦争、帝国、植民地」との関わりに配慮した調査研究は非常に少ない。ジャンルとしての「戦争・帝国・植民地」研究ではなく、いま・ここにある日常生活文化一般、「民俗」を「戦争・帝国・植民地」の文脈で捉えなおす必要を再認識させられた。

お二人の書評には、多くの有益な論点が示されている。これらについては、早い時期に、執筆者間での議論を行なうとともに、個別の記述と分析において個々の執筆者の見解を示すことになる。丁寧な読解と詳細なコメントをしてくださった松浦・松田両氏に感謝する。

文献

岩田重則，2003,『戦死者霊魂のゆくえ－戦争と民俗－』吉川弘文館.
川村邦光編著，2003,『戦死者のゆくえ－語りと表象から－』青弓社.
関沢まゆみ，2010,『戦争記憶論－忘却、変容そして継承』昭和堂.
田中丸勝彦，2002,『さまよえる英霊たち－国のみたま、家のほとけ－』柏書房.
丸山泰明，2010,『凍える帝国－八甲田山雪中行軍遭難事件の民俗誌－』青弓社.